

佐々木剛二著

『移民と徳』

——日系ブラジル知識人の
歴史民族誌』

評者：根川 幸男



1 本書の研究史的意味

日本の近代において、社会問題と海外移民はごく近縁なテーマとして議論されてきた。自由民権運動家であった水野龍（1859～1951）は、政治運動の挫折の後、皇国殖民会社を設立し、1908年に最初の日本人集団移民をブラジルへ送っている。ジャーナリストで社会運動家であった横山源之助（1871～1915）は、その後半生において海外移民に社会問題の解決策を見出し、1912年にみずからブラジルを視察している。また、第1回芥川賞を受賞した石川達三（1905～1985）は、移民輸送監督助手としてブラジルに渡った体験から、国内問題の犠牲者として故郷を捨てて海外へ追いやられる移民たちの現実をその受賞作『蒼氓』において活写した。南米への移民送出は、1924年の帝国経済会議によって国策化するが、この事業を最初に管掌したのは内務省社会局であった。

日本の近代化の過程で、海外移民は人口問題や労働問題の解決策として重要な位置を占め、人文社会科学の分野でもこの現象に一定の関心が払われてきた。特に、日本からブラジルへの移民は1908年に始まり、太平洋戦争でいったん途絶するものの、戦後復活して1970年代ま

で続いた。その結果、現在ブラジルには約190万人という世界最大規模の日系社会が形成されている。したがって、日本史が「日本人の歴史」であるとするなら、海外移民の研究はその完結のためには不可欠な要素となるはずである。しかしながら、ブラジル日系移民の研究は、その問題の重要性に比して、まだまだ多くの未開拓分野を残している。特に日本人の海外集団移民という現象が遠い過去へ押しやられてしまった昨今、移民を対象とする研究は活発に進展しているとはいいがたい。それは、ここ数十年間に蓄積された、ブラジル人を含む在日日系人を対象とする研究の成果に比べて、痛感するところである。事例研究が散発的に現れる一方、理論面で大きな進展が見られない。

本書は、そうした状況への批判と克服の試みのため、「民族誌」(ethnography)という方法を用い、人類学における知識研究と移民研究という二つの問題系の交差点として、移民の「ローカルな知識実践」に着目する。すなわち、ブラジル移民が本格化する1920年代から約1世紀にわたって、ブラジルの日系移民知識人たちが展開した実践に着目し、日本人移民とその子孫が独自の政治的主体として構築された過程とメカニズムを明らかにする。具体的には、移民をめぐる政治活動や移民研究において自明のものとなされがちであった、「日系人」「日系社会」といった概念の創造の過程やメカニズムを解明するため、1920年代から2008年のブラジル日本移民百年祭に至る歴史について、周年史・記念誌編纂や史料館建設という移民知識人の実践に着目しながら詳細な分析を行っているのである。

2 本書の内容

本書は6つの章と巻末の補遺で構成されている。内容を要約すると、次のようになる。

第1章では、かつてブラジルで発行されていた邦字新聞『伯刺西爾時報』や『日伯新聞』に掲載された移民知識人の言説を分析し、「出稼ぎ根性」批判やブラジルへの文化的同化、法的帰化といった永住主義の促進が、これら邦字新聞による言論活動を通じてなされたことを確認する。そして、1920年代から40年代の日系知識人の「ローカルな知識実践」の典型例としての周年史・記念誌編纂に見られた再帰性・自己言及性の萌芽が、戦前の移民ジャーナリズムにすでに現れていた点を指摘している。

第2章では、第二次世界大戦後の日本の移住政策の中で、政治的主体としてブラジル日系人が組織化されていく過程とメカニズムを明らかにする。まず、ブラジル当局の言論統制により、祖国との通信手段や日本語メディアを奪われた状態で出発した、ブラジル日系社会の特異な「戦後」から解き明かす。後年のブラジルや日本において、ブラジル日系人はしばしばモデルマイノリティとして表象されるが、戦前からそのような評価が固定していたわけではなかった。ブラジル日系移民の戦後史は、日本の敗戦を認めなかった「勝ち組」とそれを現実として受け入れた「負け組」の対立・抗争から開始された。そして、日系社会の分断が深まるとともに、ホスト社会内でみずからの評価を失墜せしめ、排日の空気を醸成する結果をもたらした。そこで、危機感を抱いた日系知識人たちは、農学者で日系社会のリーダーの一人であった山本喜代司（1892～1963）を中心とする政治的実践によって、こうした対立や分断を止揚していく。例えば、「サンパウロ四百年祭」（1954）、「ブラジル日本移民五十年祭」（1958）という記念行事を通じて、ブラジル日系社会の内的統合がなされただけでなく、戦中に分断された日本政府との外交的回路を復活させ、戦後の日本・ブラジル双方における日系人の政治的イメージ

の原型が創出された。その結果、ブラジルのジャーナリズムでは反日的言説が姿を消し、日系社会の地位を押し上げることとなった。

第3章では、戦後サンパウロで開かれたサークル「土曜会」の活動に注目しながら、日系知識人たちが独自の認識論にもとづいて展開した討論会、同人誌発行、コロニア実態調査などの知識実践を分析している。これらの活動は、移民／日系人による自己認識や言説の形成に強い影響を及ぼした。特に本章では、1958年の移民五十周年記念事業として始まった「コロニア実態調査」という、当時約40万人と推定されたブラジル日系人の全戸訪問による空前の日系社会悉皆調査の過程と成果を取り上げている。日伯両政府からの資金や寄付、宝くじ販売、プロレスラー力道山の慈善興行にまでに依存した調査費用の捻出、クリーニング店の営業網を活用した調査票配布、日本の23倍の国土を駆けめぐる調査行に加え、その集計におけるコンピュータの導入という未来を先取りした成果の回収など一連の過程描写は、著者の意図をはるかに超えたドラマチックな効果を及ぼし、本書の中でも感動を呼ぶクライマックスとなっている。

第4章では、1980年代半ばから2000年代における、邦字新聞社と日系旅行社の分析を通じて、「移民社会」に働いていた、凝集と拡散という二つの形態学的な作用について検討している。記事の発信や宅配システムを通じて「凝集」の機能を担い、「日系社会」に実態を与えたのが邦字新聞社であったという。ところが、1970年代後半までに移民第一世代の高齢化、第二・第三世代のブラジル主流社会への参画が進み、それは移民社会の「拡散」と捉えられた。1980年代後半に始まった日系人の在日就労はこの「拡散」を促進するものであったが、これを促進したのは、出稼ぎを専門とする日系

旅行社であった。本章では、何人かの邦字新聞記者へのインタビューの成果として、彼らのナマの語りが提示され、本書の抑制された記述に精彩を与えている。

第5章では、さらに21世紀を迎えてからのブラジル日系社会を対象に分析を進める。すなわち、2008年の「ブラジル日本移民百周年祭」前後における移民知識人たちの実践に焦点を当てながら、ブラジル日系移民の記憶や歴史をめぐる現代的条件について検討し、移民祭において〈徳〉をめぐるテーマが中心的な場所を占めたことを論ずる。百周年をめぐる繰り返し語られ記述された〈徳〉は、移民が道徳的な資質を発揮したことによって「成功」を勝ち取った主体であることを示す認識の枠組みとして機能した。特に、百周年をめぐるサンパウロ人文科学研究所やブラジル日本移民史料館周辺の参与観察や聞き取りは、こうした機関の職員や関係者の信頼を勝ち得、きめ細かな関係構築を行った著者ならではの同時代史料を提供している。

本書を特徴づけているのは、こうしたフィールドワークで得られた豊富なデータの分析の成果としての、理論化への強い志向性である。第6章では、前章までの通時的・共時的記述によって明らかにされた民族誌的事実を横断的に分析しながら、それがいかなる理論的示唆を持っているかを明らかにする。すなわち、グラムシやフーコーらの「知識人」研究と比較しつつ、ブラジル日系移民研究の理論的課題克服の努力がなされているのである。

3 本書の問題点と今後の期待

ここで評者として問題点を挙げるならば、本書が「移民知識人」と一括した行為主体の多様性についての追究の必要性である。本書は、主な分析の対象として、サンパウロ市に集まった日系知識人グループ「木曜会」とその延長上に

あるサンパウロ人文科学研究所やブラジル日本移民史料館、戦前から移民統合の行為主体であった邦字新聞社の実践を取り上げている。しかしながら、移民社会の知的活動は多様で、その実践の裾野は意外に広い。

上記の機関に連なる知識人や一部の邦字新聞記者が、周年史や記念誌においてブラジル日系移民の「公的な歴史」を創造する特権を有したことは事実であるが、移民をめぐるローカルな知的実践はそれらに留まらない。例えば、戦前、サンパウロ州の内陸農村に拠点を置いた栗原自然科学研究所とその系譜に連なる戦後のブラジル博物研究会のアマチュア研究者たちも、さまざまな知的実践を行ってきた。彼らは、ブラジルの自然環境や動植物、天体に至るまで、移民が開拓前線で格闘した「自然」を対象化し、それを日本語で発信することによって、自然科学的な面から「ブラジル」を表象したのである。栗原自然科学研究所のメンバーが行い、京都帝国大学天文台に観測記録を送り続けた黄道光の研究などはその代表的な例であろう。

また、第3章では、ブラジル日本移民史料館が建設される際、最初そのモデルとして、ブルメナウの植民家族史料館など、ブラジル南部にあるドイツやイタリア移民の施設が参照されたという。こうしたドイツやイタリア移民の自己組織化や自己表象はどのように行われたのか。彼らの史料館の展示は日本移民史料館とどのように異なるのかなど、各エスニック集団の知的実践の比較の視点から考察を深めていただきたいと考える。

さらに、第4章の分析では、日系社会凝集のエージェントであった邦字新聞各紙のうち、『ニッケイ新聞』のみが分析の対象とされ、『サンパウロ新聞』や『ニッケイ新聞』の前身の一つである『日伯毎日新聞』はほとんど取り上げられていない。これらの他紙に分析の対象を拡

げることによって、もともと多様であった主体を凝集するエージェントとしての移民新聞のあり方の相違まで理解を深めることが可能となろう。また、邦字新聞社と日系旅行社を、正反対のベクトルを持つ行為主体として分断してしまうことは、あまりに図式的な理解につながってしまうのではないか。「日系旅行社と日本語新聞社はこの「社会」をめぐる二つの異なった原理をもつ装置として機能していた」(p.240)という傾向は見られても、明確な線引きが困難な面も有していた。例えば、2000年代のある時期まで、『ニッケイ新聞』と在日就労のエージェントであったA旅行社の経営者は、同一人物であった。そして、邦字新聞にとって、多くの日系旅行社は大きな広告主でもあり、さかんに在日就労の広告や記事が掲載される、持ちつ持たれつの関係であった。こうしたことを考えると、凝集と拡散という逆方向の機能を担ったとされる邦字新聞社と日系旅行社は、在日就労という〈逆移住〉現象の加速にもいわば共犯

関係にあり、相互利益的な立場にあったことが考えられる。

とはいえ、本書は、「表象の危機」後の人類学・社会学の直近の成果をふまえ、民族誌の方法論的問題に自覚的・批判的でありつつ、民族誌的記述の新たな可能性を提示した。綿密なフィールドワークによって収集した史資料をふまえた実証研究としても、すぐれた内容となっている。本書がブラジル日系移民研究の新たな出発点となることは言を俟たない。評者としては、本書の刺激により、移民研究が上記のような問題点を克服しつつ活発に進展していくことを願ってやまないのである。

(佐々木剛二著『移民と徳——日系ブラジル知識人の歴史民族誌』名古屋大学出版会、2020年2月、vi + 372 + 18頁、定価6,930円(税込))

(ねがわ・さちお 国際日本文化研究センター・プロジェクト研究員)